

爪切り屋メディカルフットケアJF協会 協会通信

NO.2

2008年7月15日発行

編集・発行/爪切り屋メディカルフットケアJF協会 広報委員会

〒179-0085 東京都練馬区早宮3-12-5 TEL03-3992-1824 FAX03-3992-3309



「フットケア教室にて先生の施術を受ける」

私とフットケア (連載)

爪切り屋メディカルフットケアJF協会 会長

宮川 晴妃

到着後2日目よりヘバルト海の乙女の愛称で親しまれるフィンランドの首都ヘルシンキ、森と湖の国に到着。ヘルシンキ駅より電車にて20分程で学生寮のあるカンネルマキ駅、駅から寮は近い・・・やっとな堵した。

ルンギ市内のフットケア教室で学ぶことになる。2,3日は通訳のユハ氏にお願いし一緒にきてもらったが、頭は真白!!全くわからず、解剖学、実技と行うが、言葉だけの問題ではない。通訳してもらっても何にもわからず、自分の思慮の甘さに腹がたった。

どうしよう、どうしよう、お手上げ状態がつづく……………情けなく寮に帰ると疲れと不安で白夜のなかの美しい夕日を見ながら、涙したこともあった。立川にある老人施設「至誠ホーム」の計らいで姉妹施設であるパキラ老人ホームの中のフットケア室で実技を学ぶことも出来た。高齢者の入所施設のいずれもが足のケアを重要視していることに興味を持ちフットケア室の機能について施設の方に質問した。「足、足裏、足指、爪の役割と解剖学について学び、正しい技術を持った人が足病治療医としてケアを行っている」「北欧の冬は長く寒い、ブーツを長期にわたって履いているので、足の変形・足爪等の異常が起こり易いため足のチェック、ケアが必要なのです」との答えが返ってきた。私は目が覚めた。それを学ぶために一途に思いを馳せ日本からやってきたのに・・・今日から今から自分を変えようとそんな思いで一ヶ月が過ぎていった。ほんのちょっと学ことが楽しくなってきた。テープを持って教室へ。



「教室の前で」

以下次号へ



「教室内」

・・・宮川晴妃先生から会員の皆様へのメッセージとして連載していきます。お楽しみに・・・

平成20年度定時総会報告・・・2008・4・26

2008年4月26日に練馬区役所2階交流会場において、爪切り屋メディカルフットケアJF協会平成20年度定時総会が出席者22名、委任状31名（会員総数63名）で大須賀理事を司会・議長として開催されました。活発な意見交換がされました。「爪切り屋」メディカルフットケアJF協会会員の皆様にはすでに5月に議事録をお送りしていますので、詳細は議事録をご覧ください。

会長総会挨拶（会長欠席のため高橋代読）

ご多忙のところお集まりくださいましてありがとうございます。

「爪切り屋」メディカルフットケアJF協会設立より10年目を迎えるようとしております。これも会員の皆様のおかげと感謝いたしております。

本日は「定時総会」「研修会」と大切な日にお目にかかることがかなわず誠に申し訳なくお詫び致します。

フットケアも日本フットケア学会での認定書、厚生労働省による糖尿病外来での点数制度の問題と種々取りざたされております。それらの件につきましては急ぎ厚生労働省に向き話をしてきたいと思っておりますのでお時間をください。

これからも「爪切り屋」メディカルフットケアJF協会は教室をはじめ、全国各地で行う講習会を通じフットケアの実技指導と努めていきたいと思っております。フットケアは心のケアと自立へのケアです。一日でも長く自分の足で歩き、行きたい所にいけるように願っています。

本当に今日は残念ですがお許しください。5月には教室でお待ちしております。

ここが知りたい フットケア

Q & A の形で皆様からの質問に宮川先生に答えていただくコーナーです。

ご質問をお待ちしています。



会員報告：平成20年第1回研修会・・・2008. 4. 26

平成20年度定時総会が午前に行われ、午後からは研修会が44名の参加で行われ、そこで会員報告を鈴木良枝氏と加藤まち子氏が報告されました。いきいきとしたホットな内容でした。

○介護者のための「いきいきフットケア教室」を行って 報告者：鈴木良枝

平成19年度の地域包括支援センターで、自宅で介護されている方々を対象として月1回開催されている「介護者の集い」でいきいきフットケア教室を2回（参加者5名、7名）シリーズで行い、受講生に行動変容があったとの評価が得ることができました。受講生の行動変容については、少人数であったこと、講師の熱意が具体的に教材として示されたこと、さらに講習終了時に受講生にフットケアを想起できる講師手作りの記念品がプレゼントされたことなどがあげられています。



「鈴木さんグッズあれこれ」

○「新世紀に求められる介護」というタイトルとの出会いから 報告者：加藤まち子

- 看護師としての原点を忘れていた自分との出会い
- 現在の仕事場
 - *介護老人施設（週3回）
 - *デイサービス施設（不定期）
 - *グループホーム（週1回）
 - *老人病院（週1回）
 - *自宅で
- 今後の課題と夢

東京の九段で「新世紀に求められる介護」というタイトルの研修会に参加して、宮川先生に出会った。

そこで、これまでの自分自身の「手」の反省をした。看護師の「手」は攻撃的だったと・・・

宮川先生の「手」はひとの足を包む。包まれた感触は柔らかく、手の柔らかさの技術に触発された。一時期家族の介護などの事情で退職していたが、現在はテクニックとしての技とともに、ワークライフバランスをモットーに仕事と人生のバランスを考えながら、どのように相手を包むのかを伝えていきたいと思っている。

平成20年度第1回研修会 特別講演・・・2008. 4. 26

○特別講演「足と爪の病気とフットケア」 講師：済生会川口総合病院 皮膚科主任部長 加藤 卓朗 先生



公演の内容は①要注意 足と爪の病気の病気 ②糖尿病の問題点 ③フットケアの実情と問題点 ④当科におけるフットケア外来 ⑤足と爪の異常と下肢機能 ⑥ウォーキングを考える と幅広く、興味の尽きないテーマでした。今回の協会通信では、現在協会としても検討課題となっているところから、③フットケアの実情と問題点をとりあげたいと思います。なお今回講演内容の一部につきましては、加藤卓朗先生参加された研究チームでの研究成果であり、配布資料以外の未発表のものにつきましてはここに掲載することができません。講演の一部をご紹介します。私たちにとってかなり参考になる内容でした。

* フットケアの分類（加藤私案）

分類	主な目的	担当者
日常	足の手入れ	本人、家族、介護者、施設職員、
医療	脚の切断を防ぐ（予防）	医師、看護師、薬剤師、理学療法士、検査技師、栄養士、義肢装具士
美容	美容	エステティシャン、ネイリスト

この分類の目的には、残念ながら爪切り屋メディカルフットケアJF協会が目指している『バランスのとれた歩行をケアの立場からサポートする』という目的はみあたりませんでした。まだまだ私たちの活動が社会的認知にはいたっていないことを再確認することになりました。しかし、宮川式フットケアについては右のようなスライドが用意されていて、宮川式の「爪切り」の技術の高さについての評価をされ、専門的技術としての位置づけをされていました。

宮川式フットケア

- ・ 主な目的は安全に痛くなく爪を切ること
- ・ 患者に対して有用な専門的技術
- ・ 足の治療、日常・医療・美容的フットケア

すべてにおいて高く評価される

- ・ 皮膚科医としては連携が今後の問題
- ・ 皮膚科医が習得すれば治療応用可能



理事会を経て、総会の総意のとおり、定款（案）第 35 条「修了証は協会が発行する」は、総会時欠席であった会長に確認されました。これをもって定款は平成 20 年度定時総会議事録にある変更部分を含め、全て承認されました。

また、決定事項として協会の技術レベルの安定と向上のために、会員限定の講習を早宮教室において開催することになりました。そこで、会長のスケジュール等を調整し日程を決定しました。

講習日 : 8月31日(日)
 9月25日(木)
 10月29日(水)
 11月30日(日)
 12月25日(木)

時間 : 13:00~17:00

講習内容、講習料については検討中です。
 ご希望、ご意見等ございましたら、
 事務局までお寄せください。

＝事務局からのお知らせ＝

定款第 9 章の定めるとおり、現在協会会員としてすでに開講・開業されている場合、今後新たに開講・開業される場合、「①教室開講者は理事会の承認を得る②開業者は理事会へ報告する」と、なります。申請・報告をお願い致します。事務局にご連絡いただければ申請書・報告書を郵送させていただきます。担当（高橋）

また、商標登録は詳細調査を終え、6月13日に特許庁に商標登録願を提出しました。

フットケアを経験して

・・・投稿記事

「爪切り屋」メディカルフットケア JF 協会『協会通信 No.1』を見たお客様から投稿がありました。

私(四十七才)は、三十六才の時出張中脳出血で倒れ、その結果左半身麻痺になってしまいました。当初はもう一生自分の足だけでは歩行不能と宣言されましたが、職場復帰の傍ら毎日リハビリを続けた結果、現在では、普通と何ら変わらない生活を送るようになりました。

然しながら私の職業が薬物犯罪の取り締まりと言う特殊な性質上、麻痺を隠すためにも体を鍛えることを目指し毎日二万歩歩き、休日には険しい山登りをする等極端なトレーニングを続けた為か、骨折・捻挫が頻繁で、車には包帯と応急用の薬を常備する等、「いつもどこかを怪我している」所謂、生傷の耐えない状態でした。

その原因は左足の運動麻痺・感覚麻痺・無茶をする性格・にあった事は明白でした。

そんな中フットケアの資格取得を目指す人と知り合い、ある機会に「自分の練習モデルに足をケアしてみないか?」と、誘われ、練習台ではありますがフルコースのケアをやらしてもらいました。当時の私の足は、指は水虫で亀裂が入り、爪は乾涸び、毎日相当な距離を歩く為か足の裏の皮は分厚くなって至るところにタコができていました。数時間のケアを経た後、私の足は格好のいい爪、ピンク色の光沢のある肌に変化しケア前と違い、少年期の様に若返った瑞々しい足になった事に驚きました。ケア終了時に、「少し歩いてみてください」と言われ、一歩踏み出した時の感動はまた格別でした。フローリングの床の木の感触を久しぶりに感じ、木の暖かさを遠い昔に忘れていた事に「目から鱗」の感動でした。

歩行時に指にかかる圧力を予測し丁寧に切られる爪のためか、麻痺した足も安定し歩き方もかわりました。その後定期的に足のケアをやらしてもらい、その結果あれほど生傷の絶えなかった体が、一度も怪我なくリハビリの先生も「最近怪我しないけど、どうしたのですか?」と驚く成果で、一層の回復のために頑張る力になっています。

編集後記

爪切り屋メディカルフットケア JF 協会の会員が情報を共有する一つ的手段として、この通信を発行することに理事会で決定されました。会員の皆様のご意見を頂きながらより良い広報誌にしたいと思います。

広報担当 関根・高橋

